

「あすへひとこと」(邑楽町老人クラブ連合会・あすへひとこと編集委員会)は、邑楽町在住のお年寄りたちの貴重な体験談を、邑楽町あすへひとこと編集委員会が編集・発行したものです。

若い人たちに語り継ぎたい。そして、次の世代に残してほしい貴重な話しをお届けします。

お年寄りたちの貴重な体験談 (第十三回)

あすへひとこと

昔の稲作り

田んぼが一面に水輝く初夏となるころ、今日は田かきだという。「お前は鼻取りをするんだ」という父の言葉に、私に鼻取りができるかなと、不安を感じて、もじもじしていた。すると間もなく、父が馬を連れてきた。

早速、紺のももひきをはき、背中に着ごきをつけて、馬を田んぼにひいていく。馬のくつわに棒をつけ、馬の後ろに万鋤(まんぐわ)をつけて、それをまっすぐに田のくろに添って行けという。馬の前足でけった泥水を浴びながら北へ、南へ、東へ、西へと歩く。万鋤を押されるたびに水が押しよせてきて、今歩いて来たところも分からなくなる。「もっと西だ、東だ!」と大声でど

なられながら、泥まみれになって、夕方までに二反五畝(せ)ほどの田かきが終わり、重い足をひきつりながら家へ帰る。

その翌日は田植え。早く早苗を田んぼへ散らせといわれ、両手に四束ずつ提げて田んぼへ点々と散らす。一反歩三百束の苗を散らす。赤いたすきに紺がすりの着物、手甲をつけた姉さんが五、六名来る。見る見るうちに青田に変わる。

その夜は「さなぶり」といって、酒と肴(さかな)で一年の豊作を祈る行事である。うどん、なまり、豆腐などで、皆そろって祝杯をあげるのである。



雨乞い

私が十才ころのことであった。梅雨が明け、土用をすぎても雨が一滴も降らず、陸稲や野菜までが枯死寸前の様相を呈した。

村人は皆困り果てて、毎日、太鼓をたたいて、八坂神社に「しめ」を飾り、お祈りした。しかし雨は一滴も降らず、夕立もない。いよいよ雨乞いをするようになった。

各農家より藁(わら)をもちよせ、長さ三〇メートルもある大蛇をつくった。舌は大きな洗団扇(せんたんせん)、目玉は桐の丸太を輪切りにしてつくり、物恐ろしいような大蛇が動きあがる。

二人で太鼓をかついで、長竹の上に紙の「へいそく」をつり、五、六十人が集まって、「雨降れんどんどこしょ」と太鼓をたたき、焼けつくような大地を、素足で村中を練り歩く。通り道の地区民は井戸水を大蛇に振りかけ、葦川用水掘りに飛びこんで大蛇をもんで、雨の来ることを祈った。

その夕方、大粒の雨が雷鳴とともに降りだし大地を潤したが、数時間でやんでしまった。



翌日は長良神社へ、お礼参りやら大騒ぎであったが、焼け石に水の夕立で、なお干ばつは続き、農作物は不作になった。

昭和半ばになり、掘り抜き井戸が始まって陸田ができ、機械文明の発達之恩恵で日照りの害も少なくなった。よい時代を迎えるようになった。

高齢者の語り第一集
「あすへひとこと(昭和六一年二月一日発行)」より
「昔の稲作り」、「雨乞い」
故・小島喜代司さん(前原・四区)

ひとりと From editors

▼早いもので、広報編集に携わるようになってから、いつの間にか一年が過ぎました。この一年は私にとって激動の一年でした。東日本大震災の余波が残る中、初めての職場異動、初めての取材、そして初めての結婚。慌ただしい毎日、毎月2、3回くらい逃げ出したくなることもありましたが、そのたびに妻や家族、先輩、友人、そして町民の皆さんなど、多くの人に支えられ、何とか乗り越えて来れたような気がします。▼そんな思いで作った6月号。今回も年間ページ数を調整し、費用を抑えたまま、イラスト投稿ページがカラーで掲載できました。これからも、皆さんからのたくさんの投稿を、お待ちしております。(秋)



Photo 高根澤高明(記録ボランティア)



明・暗・紫
(多々良沼公園
浮島弁財天)



広報おうら

ORA TOWN Public Relations

平成24年6月号 No.549

毎月1日発行

編集・発行 邑楽町役場企画課

〒370-0692 (住所記入不要)

☎ 0276-88-5511 (代表)

☎ 0276-47-5007 (企画課直通)

☎ 0276-89-0136

URL <http://www.town.ora.gunma.jp>

E-mail koho@town.ora.gunma.jp

邑楽町携帯サイト

2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。

携帯用URL <http://www.town.ora.gunma.jp/k>

